

浮遊したままの身体を生きる

芹沢俊介+大澤真幸
SERIZAWA Shunsuke and OSAWA Masachi

「軽さ」志向の反転

大澤——「軽さ」については、商品や風俗的な現象を含めてさまざまな視点から語ることができるので、どこからはじめるのかは難しいですね。例えば、僕は80年代初めに大学を卒業したんですが、そのころ「新人類」ということが言われていました。僕もその世代に属していることになる。あるいは知的なものの世界では、「ニュー・アカデミズム」と呼ばれる若い学者たちの頭角が話題になっていた。僕なども、とてもいやなんですが、日外アソシエーツの人物データの項目には、僕のことを「ニューアカのホープ」とか記載されている。それはともかく、「新人類」と「ニュー・アカデミズム」に共通するのは、ある種の軽さの感覚だったと思います。自らを拘束する規範から自由になって、理性の軛ではなくて感性を信じて動けばいいというような意味のことが、言われたり、書かれたりしていたと思います。こうした現象は70年代後半から雰囲気としてはあったと思うんですが、80年代に入ると明確な形を取って現われてきた。その代代的な対応物として「新人類」や「ニューアカ」という言葉が出たんだと思います。ところが、ここで先に結論めいたことを言わせてもらおうと、軽さへの志向はこの間ずっと

続いていだけれども、それがあまり続いてしまうと、ある種の反転が生じるのではないか、と思うのです。言わば「軽さのもっている重さ」みたいなことが現われてくるのではないかと、というが僕の考えなんです。

具体的なイメージを一つだけ提示しておきます。いま「新人類」という言葉を、軽さを象徴する代代的な表現として扱いました。その後宮崎君の事件が起きたときに、「オタク」ということが話題になりました。オタクも世代を表現する造語です。が、一見しただけですと、新人類とオタクは対照的にも見えます。というのも、新人類は、人生の歩みにおけるステップの軽さを代表するのに対して、オタクは、ある一つの主題に過剰に拘泥し、それに言わば「はまって」おり、そこから抜け出すことができないかのような状態にあることを考えると、歩みの重さや暗さを代表している、と考えることができるからです。オタクの常軌を逸した主題への拘泥の度合いは、かつての——一つま「新人類」以前の——世代の大義や価値や人生の目的といったものへの執念に匹敵する、あるいはそれを凌駕するものとも言えます。しかし、他方で、オタクは軽い現象であるとも言える。オタクがそれぞれに取り組む主題は、ある視点からするとくだらないことであり、深い

理由もなしにまさに感性によって選ばれている——つまり「好きだから好きだ」というトートロジーによつてしか説明できないような理由で選ばれている——からです。僕の考えでは、オタクと新人類は本当は似たような現象だと思っているんです。自分の「趣味」に熱狂的にのめり込んで、動きがとれないほどに重くなってしまうオタクは、自分の感性を頼りに好きなことをやる新人類と、ほとんど同じ人物、同じ世代だったのではないかと。オタクは新人類に直属しているし、事情に詳しい評論家などもその系譜的な連続性を主張しています。すると、新人類の軽さがオタクの重さへと反転していくメカニズムがあるのではないかと考えたくなります。80年代前半には確かに軽さへのトレンドのみが純粋に表面化していた。しかし、その後、軽いということ自体の内に重みが孕まれてしまうというような現象が現われてきたのではないかと、と思います。そうした反転を象徴したのが、オウム事件です。

芹沢——確かに、軽さを追い求めることが、いつの間にかその内部での重さに転じていくという逆説が、オタクといわれる若い人の生態に見られると思います。同時に、単に軽くなつちゃうことに対する身体反応として、何らかのブレーキを自己にかける現象があるような気がするんです。言い換えますと軽さをもっと軽くするために、逆にある種の重みを自分にかけていくという現象があるんじゃないか。例えば茶髪、ピアス、ポニー・ヘアッシング、あるいはカラーコンタクトをつけるといった行為は、部分的な重力を身体にかけている気がするんですね。軽いマゾヒズムといいますか……。それはおそらく無意識の対応だと思うんですけど、その対応が全体的なシステムの浮遊力、浮力に巻き上げられていくことに対し微調整をしているという印象があるんです。

大澤——軽さの逆説の大規模な表現がオウムではないかと、言いました。オウムと言うと誰もが連想することの一つが、空中浮遊ですね。僕も『虚構の時代の果て』（ちくま新書）を書いたときにそこを重視したのですが、やはりここには重力から解放されて浮いていたいというアプライティヴな欲望があったと思います。麻原はいろいろな超能力をもっていることになっていました。それらの中の原型になっているのが空中浮遊です。オウムに惹かれた人の中で、浮くことへの欲望に感応していた人も多かったのではないかと、思うのです。

オウム事件のときに、オウムの世界といろいろなアニメの世界との類縁性が語られましたね。例えば、宮崎駿さんの作品世界との類縁性なども語られた。僕も、宮崎さんの《ナウシカ》を引きました。《ナウシカ》だけで

なく、あの人の作品の多くに共通して見られるモチーフは、浮いたり、空中を飛ぶということではないかと、思います。典型的には、《ラピュタ》ですが、他にも《魔女の宅急便》《紅の豚》等々にそれは見られる。最新作の《もののけ姫》にはあまり「浮く」ということが現われないので、それはそれぞれ興味深いものがありますが、

こんなふうな、オウムのものへの衝動の核の部分に、浮くことへの、つまり軽さへの志向があると思うのです。がしかし、この軽さは、明らかに、僕たちが80年代に考えていた、いろいろなものにこだわらずに自由にやっていくという軽さではない。彼ら自身はあるイデオロギーに「ハマって」おり、自由のなきがある。つまり軽いのに没入して自由を失っているという状態なんですね。だから軽さをいくら追求しても、軽すぎて重くても表現したくなるような逆説が現われる。僕らはそういうことには80年代の終わり頃から気づき始めたんだと思うんです。つまり軽さと重さは矛盾する要素ではなく、相互促進しあうところがある。そのメカニズムに僕は関心がある。今おつちやった、自分自身で何かの重みをかけていく現象も、その相互依存関係の一つの現われとして理解できるんじゃないでしょうか。

芹沢——オウムの空中浮遊のリアリティを支えたのはチベット仏教ということになると思います。思想的には、仏教そのものの本質にある輪廻転生とか、死後の問題、身体と魂の関連といった問題が、空中浮遊に象徴されるわれわれの日常的な枠組みを突破しようという動きのリアリティを保証していた気がするんですね。ところが浮遊するためには修行という重い行為が必要になります。すべての現世的なものを捨てるという意味では軽いんだけど、同時に修行という別の重力がかかってくる。だから確かに重さと軽さは反発するというよりも、相互に助け合っちゃうんでしょね。

大澤——『虚構の時代の果て』は、ずいぶん芹沢さんの議論に触発されている部分があり、芹沢さんの著書から何か所か引用させていただいたのですが、一つだけ少し意地悪な引用をした部分があります。それは、芹沢さんが、オウムについて一時期興味をもっていたもののその後どうでもいいと思うようになり、関心を失っていたので、オウム事件が起きたとき不意を打たれた、という部分です。芹沢さんはこう書かれています。「オウムが選挙に出たときに、これはちよつと面白い集団だと思った」と。選挙なんだから何億かお金がかかっているはずですが、そういう大金を使って、ああした遊びをしているのはなかなか面白い、と。僕もあれを見たときふざけていると思いま

たから、芹沢さんの、国政選挙を何億もかけて皮肉
るというのは超一流の遊びで面白いという指摘を鋭
いと思います。ところが芹沢さんはその後こうおっし
ゃっています。「選挙の後麻原が結構がっかりしてい
るのを見て、あれは意外に本気だったかもしれない」
と。これがきっかけで、最初もっていたオウムへの興
味が急速に薄れてしまった、と。というのも、もしも遊
びでああしたことをしているとしたら確かにものすご
い、一流のことだけれど、本気だったとすれば、それ
はたんに政治に対して著しく音痴で、単に愚かなだ
けである、ということになるからです。

僕もその時はそう思いましたが、今考えてみると、非
常にふざけてやっている感じがする部分と、それが本
人にとってすごくシリアスな意味をもっているという部分
が矛盾しないということが、あの現象の核心的な特徴
だったと思うんです。ふざけている以上選挙に落ちても
入っても関係ないのかといえばそんなことはなくて、実は
それに賭けてもいた。だから、そこでは物事を相対化
してシニカルに距離化する軽さの側面と、それに異常
に没入して当人にとってすごく重いものになっていると
いうこととが、ダイレクトにつながっているんだと思います。
あの時には一新興宗教のつまらない実践に終わった
けれど、このダイレクトな繋がりがもたらしたる由々しき結
果は、95年には無視しようのないものとして僕ら
の前に現われた。例えば、オウム
はハルマゲドン信じ

ていたことになっていますが、これだつてどこまで本気
なのかわからない、という面もあったと思う。つまり彼ら
には、一種のフィクションとしてそうなっているんだという
相対化している部分もあった。しかしだからといってこ
のフィクションから常に離脱しようような自由な軽やかさ
をもっていたわけではなかった。こうしたところで軽さと
重さが相互促進しているというのが僕の論点です。

〈外の目〉と「すべて同じさ」

芹沢——多分それは自分の外の目には限界がある
ということだと思うんです。外の目は割合単純にこれ
までの経験ということでもものを見るから、そこから見
るとそれほど本気だというふうには見えなかったんで
す。例の「ショーコーショーコー」という歌にしても、ぬ
いぐるみみたいな仮面をかぶつての踊りにしても、本
気で選挙をしているとは、あの時はどうしても思えな
かったんです。でも内側では大真面目だった。そのギ
ャップが僕には分からなかった。それがあの時の僕
の表現になったと思うんです。

大澤——〈外の目〉という語の喚起力だけ借りて、この
語を芹沢さんとちよつとずらした意味で取ると、軽く
なるというのはある意味では外の目をもつことなん
です。言い換えれば、さまざまなことを相対化してどれも
同じだという態度をとるということ。例えば、僕よりだ
いぶ上の世代に属する小説家に村上春樹がいますね。
彼は70年代以前の全共闘世代的なところからもちろ
ん出発しているのですが、それを離脱しているところ
があり、彼より若い人にも広く読まれている。そして
彼の小説には、よく「すべてが同じさ」というような言葉
が出てきます。これが軽さを志向する表現なんです。

つまり普通はみんな同じではなく、大事なことどう
でもいいことがある。自分がどんな洋服を着
るかということよりも、資本主義体制でい
か、社会主義体制でいかにとか、公民
権の問題の方がずっと大事だとい
うのが全共闘世代にはあった。
けれど、村上春樹はあえて、そ
んなことはない、重そうな理
念もくだらなそうなことも同
じだという態度をとるこ
とを方法的にやっとな
ります。そうすること
で、「大事なこ
と」の重みから解放さ
れる。だから軽さ



芹沢俊介

というのは「すべてのものは同じさ」という態度を取ることで、言い換えれば、それはすべての選択しうる問題に対して等しい距離を取ることを意味するわけで、その意味で、どの選択にも予めコミットしない、外の目を取ることに同じことになると思うんですね。

しかし、僕たちが気づいたことは、外の目はどこにもないということです。外の目を取ろうとしても、それ自身がもう一つの内の目になってしまう。純粋な外に立つ——哲学的な言い方をすれば超越論的主観——という立場を現実的なものとして確保しようとするれば、それ自身が、やはり世界に内属する場所に根をもたざるをえず、結局は、重力の圏域から離脱することができなくなる。むしろ外の目を確保しようとして外に出ようとしているときには、自分のいる場所の重力をあえて忘却しようとしているので、かえって足をすくわれるというか、自分が本来自由になりきれないはずなのに自由になった気になってしまう。純粋な外の目の不可能性が現象として現われたのが、述べてきた軽さの重さへの反転という現象ではないでしょうか。

芹沢——重さと軽さをいわば相対性のもとにおいて考えることは当然の理ですが、僕は、そういう比喩的な比較なしに、軽さなら軽さ、重さなら重さと言うしかないような現象が出てきているような気がしてならないんです。何かそこだけ完結しているというか、それ自体で完結している重さや軽さといったものがあるんじゃないか。ある場所があってそこに行くのと軽さがそれ自体で自己主張している、そういう現象があるような気がしてならないんです。オウムもそういう観点から捉えないうまくつかまえられるのではないかと。つまり軽さ自体のもつ系譜というか、そこにオウムを置いてみないと分からないのかな、というのが自分の中に引っかかりとしてあるんです。

極限的に軽い酒鬼薔薇事件
大澤——この問題を今度の神戸の事件について関係づけて考えてみたいのですが、まずこの事件には良く分からないところがあります。表面的な観察としては、芹沢さんのおっしゃるように、その世界で完結してしまった軽さみたいなもの

を感じるんです。どういうことかと言いますと、この事件で少年が逮捕された時、僕は体調を崩して二週間ほど何も仕事ができなかった。複雑な本も読めず文章も書けないので、テレビを見るかマンガを読むくらいしかできなかった。このとき、テレビは酒鬼薔薇聖斗事件のことばかりを放映していました。そして、このときまたま手にしたマンガが『金田一少年の事件簿』なんです。別に意識してそうしたわけではないのですが、ちょっと考えてみるとこのマンガには酒鬼薔薇聖斗事件と類似した問題が含まれているんです。今回の事件は前代未聞の猟奇的な事件であるけれど、『金田一少年』にはそういった事件がいつまでも出てくる。芹沢さんも書かれていたように、首をさらすというのは実際の事件ではほとんどないのですが、このマンガではそういう連続殺人鬼が次々と出てくる。僕はいつのまにかに無意識の内に、マンガと事件とを比較してしまっていたんですね。そして何か奇妙な感覚を得たんです。

簡単に言えば、このマンガと事件とを比較している内に、ミステリーという虚構と現実との間の関係が、伝統的な形態から完全に逆転してしまっているということに気がついたんです。ミステリーの快楽は簡単に言えば二つあって、一つは、超人的なトリックを解明する快楽(論理の快楽)であり、もう一つは、殺人にまで至る動機を解明する快楽(人間的な物語の快楽)だと思うんです。ミステリーを文学の他のジャンルか



大澤真幸

ら分かつのは、もちろん前者ですから、作者は技巧の粋を凝らしたトリックを案出します。しかし、もともと殺人自身がめずらしいことで、まして面倒なトリックをわざわざ工夫してまでも行なう殺人であるとする、相当に現実性を欠いてしまうわけです。こうしたことに、あらためて現実性の裏打ちを与えるのが、納得のいく動機です。深い動機という重さが、殺人のトリックに現実性を与えるわけです。が、ミステリーの場合、トリックにこそその存在根拠があるために、どうしても、トリックの技巧の程度に対して、動機の重さが不足しているという印象を与える。そのために、殺人の現実性が次落していく、トリックはおもしろいが、この程度の動機で、わざわざこんな面倒な、危険を犯した殺人を行ないそうもない、と思ってしまう。要するに、現実(の殺人)に比べて、ミステリーの殺人は動機が足りないわけです。

ところが、酒鬼薔薇聖斗事件と『金田一少年』との間の関係は、これとはまったく逆になっています。ちょうどテレビでは、少年が殺人を犯した動機を一所懸命探しているわけです。あのときには、主として、学校への恨みが動機ではないか、という論調が支配的でした。しかし、ちょっと考えてみると明らかのように、酒鬼薔薇聖斗を名乗った少年自身の視点に定位してみれば、学校や教師への恨みから殺人を犯した、という説明は、まったくどうでもよい、説得力をもたないものです。そのうちに、この種の殺人事件には、普通の意味での動機などというものはないのだ、それは殺人のための殺人だったのだ、ということに気づくようになります。動機があれば、それがどんなに重く深いものであっても、あんな猟奇的な殺人を冷静に遂行することはできないんです。殺人の陰惨さが動機の重さとしてつりあった時点で、それ以上深まらないからです。動機がないからこそ、あれほど猟奇的な殺人になりえたわけです。

『金田一少年』の猟奇的殺人も、だから、現実性を欠きますが、その理由が、伝統的な理由とまったく逆なのです。このマンガでは、常に猟奇的な連続殺人が描かれるわけですから、いつもとても重い動機が、つまりまさに「積年の大怨」が、最後に発見されるようになっていきます。しかし、僕らは今や気づくわけです。かつては動機が足りなくて、ミステリーは現実性をもたなかったのだけれども、『金田一少年』が神戸の事件と比して現実性がないのは、逆に、動機が足りすぎるからだ、と。

だから僕は、この酒鬼薔薇聖斗事件は、動機の連

関という点で、極限的に軽くなった事件ではないかと思うんです。つまり僕らは生きていく上でさまざまな規制や禁忌や否定に遭遇し、そういう重みの中で生きていくんですが、これはそういう重みを極限的に外していった、軽くなりつした事件ではないか。

しかし、ここまで軽くなりつすと、逆に、ものすごく重いとも言えるようになる。というのも、少年の動機が真空であるとき、事件を説明するために、どんなシリアスな動機や恨みを仮定しても、まだ「足りない」というような印象も与えるからです。どんな重い動機も追いつくことができないほどに重い真空状態がそこにできてしまうわけです。言い換えれば、どんな具体的な「積年の大怨」にも還元できないような、抽象的で、何というか存在論的な「積年の大怨」が動機になっている、そういう感じをもつんです。

芹沢——あの事件を軽しちやった背景には、やはり震災があると。震災は、どんな動機でも人を殺せるというくらい殺しを軽しちやった気がするんですね。命の価値をうんと軽くしてしまった。にもかかわらず、事件は現われた出来事としてはとてつもない重さ、衝撃力としてこちらにかかる。いくらこちらが重みを付けていても届かないというか、動機を重くしていてもそこに行かないという。そういう印象がありますね。

僕は14歳の少年の中心にすごい重さを感じるんです。それは彼があるとき気づいた魔物だったりするんですが、その魔物をずっと追求していくと母という存在に出会うだろう。もし彼の中心に動機があるとすると、母というのが彼に一本芯を通して重さとして現われ、その重さを払拭しなかったんじゃないか。つまりそこから脱出して軽くなりたかつたんじゃないかという見え方がするんです。

大澤——そうですね。震災のことから言いますと、直感的にも関係があると考えざるをえない。事件と震災の関係は、藤原新也も書いていましたね。震災はある意味では、それこそ本特集のテーマのように「反重力」なんです。これ以上動きがたいものはないという地面全体が動いているわけですから、本当に軽くなってしまふ。酒鬼薔薇聖斗自身の説明によると、彼の殺人は、壊れやすさ——人間の壊れやすさ——ということをテーマにしていますが、震災はどんなものもかわれやすいということを観念の問題ではなく、全くリアルな問題として明らかにしてしまつた。そのうえで彼の核にあったのは何かというと、芹沢さんは母と言われましたが、断片的な報道からは強烈な父の極端な希薄さが伝わってきます。最近、父権の復権ということ唱え

る人もいるようですが、それは父の軽さと対になっている。父というのは象徴的には法や禁止に関わる、重さを与える錨のようなものだったんですが、それが稀薄になりきっているということを感じました。

「地域浮遊」としてのコンビニ

芹沢——「反重力」の商品について少し考えてみますと、いま、コンビニは日本全国に浸透しています。コンビニなしの生活は、とりわけ若い世代の人には考えられなくなってきた。それと比較すると、スーパーは地域のシンボリックなもので、地域の日常を構成し、そこに地域の生活の匂いみたいなものを包み込む役割があったと思います。一方、コンビニには違う役割があります。僕はそれを「地域浮遊」という言葉を使って表現してみたんです。セブンイレブンのおにぎりやローソンのおにぎりの区別は、若い世代には簡単につきますね。しかし少し遠くに視点を移してみると、それらはともに「コンビニ」のおにぎりというほかないものである。つまり差異はあってもコンビニはコンビニです。そして数百メートルおきにあるとはいえ、それは地域と密着しているということではない。逆に地域から少し浮き上がって存在することで、車社会の速度感にうまく対応しているのではないかと思うんです。さらに、もっと若い中学生などの世代にとってのコンビニはまた違う。これは何なのか不思議で仕方がない。スーパーで買えばもう少し安いものも、子供たちはコンビニで買う。コンビニは彼らの身体に所属していると言いますか、身体のもつ空間に入っているという感じがするんです。「反重力」という視点からこれをどう考えたいんでしょうね。

大澤——今のお話は、言葉にするのは難しいですが、感覚という点からはよく分かります。確かにスーパーはコミュニティに属するのですが、コンビニは「ここ」性みたいなことを感じさせない。スーパーが、それを中心やアクセントにして一つの空間が拡がっていく定住性を感じさせるのに対して、コンビニはどこに行っても同じものがあるというのがポイントですね。つまり引越したとしてもコンビニとの関係は同じである。したがってスーパーのように地元で定住している人に対して便益を与えるのではなく、どこにいても、ここにしようがそこにいようが同じだという感覚を与えるんですね。それがコンビニの一つの特徴で、それが今おっしゃった「地域浮遊」と関係すると思います。

それから身体の問題からはこんなことを思いました。一見したところ、オウムはヴァーチャルな身体とい

うものを指向しているように見えますね。例えば空中浮遊にしても、厳密に問えば、それはフィクションだということになるでしょう。あれを見ながら吉見俊哉など何人かの論者は、彼らは身体も情報化してしまっている。ゲームの中の身体と一緒になんだと言いました。ただ、僕は、そうした説明には少し違和感があったんです。ゲームや情報化した空間の中では身体感は稀薄なんですけれども、オウムの場合、修行や出家、イニシエーションなど、決定的な身体感覚があることが人を惹きつけたんだと思うんです。しかしその身体感覚は伝統的なものとは違う。ヴァーチャルな脱身体化されたものではなく、それが再身体化されている感覚としてあるんです。そうした身体は、大地に根を張った身体性ではなく、いわば浮遊した身体性なんです。オウムの場合は修行を通じて得られる極限の体験としてそこに到達するわけですが、今の若者がコンビニやカーオケボックスにおいて、浮遊したものを身体化していくことについて考えると、「ここ」という重力的な足場をもつのではなく、浮遊したままの身体を生きるということが徐々に普及している感じをもちますね。

携帯電話とインターネット

芹沢——帰属性みたいなことから離れていって、わりと自分自身の世界を時間的にも空間的にももちたいというのが強くなっていると思いますね。例えば携帯電話にしても、私はずっと使わずに来たんです。ところが、子供が使っているので貸してもらって使ってみると、何かは知らないけれど、それをもつことによって世界との関わり方が変わる感覚がある。それでPHSと契約してみたんです。歩出すときには電源を切っているので連絡が来るということはないんですが、携帯をもったことによる安心感というか安定感というか、これでどこからでもつながることができるという感覚が、突然やってくるわけです。突き詰めると、どこにいてもつながっている、そうなるんですね。

もう一つはプリペイド・カードが出てきたときに感じたことがあります。それは人とモノを共有することに対する無意識の嫌悪が物質化したな、ということです。かつてなら神祕的的だと言われてしかるべき事態が、そうならず商品として成立していくことがあるのではないかと。トイレの手洗いも指で栓を触らずに済むタイプのもものが普及していますね。自分で蛇口をひねるよりも、こちらの方がいいと感じる自分がいるわけです。

それが何なのかについて理屈づけしてみると、人と同じものを共用することに対する無意識の嫌悪、自分

だけで生活空間を完結させたいという強烈なモチーフと関わってくると思うんです。自分が皮膜に包まれていながら、携帯などによって世界とつながれているという、ある種の安心感がありますね。同時に携帯はその人を装備化しますから、そのことによる完結感ももたらすんです。自分を閉じるというかたちには、軽さと重さの両義性があると思えますが、いながらにして自分を開くという、想像できなかった身体感覚が、携帯一本でできる。携帯にはいやな面もありますが、同時に携帯をもつときにやってくるある種の安心感についても言っておかないとね、単なる利便性では片づかない問題があると思います。

大澤——いまのお話は僕が考えていたこ

とも重なります。ここでは一見矛盾することが起きているんですね。一方では携帯をもつと何か安心感がある。それは、他人と接続されていることの安心感です。ところが他方で、例えば他人が触った吊革に触ったりするのはいやだし、ましてトイレはいやだといった、他人の領域に自分が入っていく感じに対する嫌悪感や、もつと純粹でありたいという感じがある。他人とつながることが安心なのに、他方では他人が入ってくることにに対する嫌悪感がある。この両者の関係を考えてみる必要があると思います。これは若い人に特に顕著なんですけど、自分自身の世界を個室として閉じたかたちで作りたいという志向がある。問題は、その空間への他人の入り方なんです。彼らは、



東京郊外 多摩 photo: 児玉房子

他人が外から入ってくることに嫌悪があるんですが、いきなり直接に内側に入る場合は構わないんですね。つまり携帯電話はいきなり内側に入ってくるんですが、吊革だと外と外が接し合う感じになるんです。いわば正面玄関から入ってくる奴はいやなんですけど、裏口ないし秘密通路から個室にいきなり入ってくるものはいいんです。

これに関しては、岩尾龍太郎さんの『ロビンソンの砦』という本の議論が、参考になる。『ロビンソン・クルーソー』で、ロビンソンが自分が朝じこもる砦を作ることによって、そこに他人が入ってくることにに対する猛烈な警戒心や恐怖がある。あの話はみんな知っているつもりでも実は良く知らないんですが、実はロビ



んです。例えば、ホームページには有用な情報が時にはありますが、個人が作るものはプライベートなものがいきなり書いてあって本当にくだらない。しかしそれは自分のプライベート・ルームをいきなり公開している感じなんです。友達と顔を向かい合って付き合うのはいやなんだけど、ホームページに電子的に侵入してくるのはいいんです。「ベル友」もそうです。特に付き合う必要もない奴がいきなり自分のポケベルに入ってくる。でもそれがうれしい。しかし普通に正面玄関から入ってくる奴とは付き合えない。

電車の中での携帯電話の使用が不愉快なのは、そこにある態度だと思うんです。例えばここで僕が携帯をかけて

ンソンが危険な目に遭うことは一度たりともなく、根拠のない疑惑しかないんです。そうした、根拠のない疑惑にかられて、安全で閉じられた砦を強迫的に作っていく。つまり、壁を厚く、何重にもし、穴をどんどん深くしていく。途中で、フライデーという部下ができるんですが、彼に対してささも安心できず、砦の中に入れてやらず、内壁と外壁の間にしか入れない。しかしそして、砦をどんどん深く閉じられてものにしていく内に、砦の反対側が開いて、ずっと向こう側に抜けてしまうんです。深く深己の内側に潜行していくと、その部分に外側に突き抜ける穴が開いてしまうという感覚。

ロビンソンの話は寓話ですが、携帯電話や、あるいはインターネットが与える感覚はこれと似ていると思う

いるとすると、僕はいわば自分だけの個室という内側に閉じこもったことになる。しかし他方では、確かに、芹沢さんとは外側で接している。電車でも同じです。お互い仲が良く話しているわけではないけれども、まさにたまたま同じ電車の車両に乗り合わせたということからくる、最低限の共同性の感覚のようなものがある。ところがそんなところで誰かが携帯電話を使っていると、彼(または彼女)だけが、その態度によって、――外面的には同じ車両の共同性に参加しながら――、自分だけの空間に閉じこもったことになってしまう。つまり個室に入っている感じなんです。それが、他の人たちには不愉快に感じられるんです。

ともあれ、携帯電話とかインターネットといったもの

が代表しているのは、他者に対して一方では閉じられていく(個室化)中で、他方では他者に対して直接的に通底してしまうようなコミュニケーションが出現するということ、こうした一見対立したことがらが同時進行していくということ、ではないでしょうか。

「軽さ」はそうしたコミュニケーションの直接性と関係があると思うんですね。それは、ここに居ながらにしてあそこに行けるという軽さに通ずるからです。例えばネット・サーフィンというのはこのことを示す典型的な比喩ですが、ある種の軽さからくる浮いている感覚のようなものがありますね。立花隆がインターネットは「ドラえもん」の「どこでもドア」みたいだと言っていますが、ここにいながらもういわば空中浮遊かあるいは体外離脱した気分になる。コミュニケーションの直接性とある種の軽さが関連のある現象としてあるという感じがしますね。

テクノロジーと「野生の思考」

芹沢——僕は「どこでもドア」のような感覚でもって時空をどこかで歪めてしまうというか、そういうところに入り込めたいという思いを子供の時からもってきたんですね。例えばある人のことを考えたら、その人のところに行けたらいいな、とかね。そうした願望がさまざまな乗り物や電話、そしてインターネットを生み出してきた。その結果、これまでは超能力とか臨死体験的なエピソードとして考えられていたことが、テクノロジーの発達によってある部分実現しているのではないか。これはすごく不思議に思えてならないんです。例えば、中沢新一がポケモンについて書いた本を読むと、テクノロジーと野生の思考との結び付きについて考えざるをえないんです。すでに、モノに鋭敏に反応する子供たちは野生の思考への回路をモノを媒介に開こうとしているのかも知れない。だとすると軽さというのは単に上へ上へと行くこととは違うかもしれないな、という思いもするんです。

吉本隆明は『新・死の位相学』(春秋社)の中で、「アフリカの段階」というのを歴史概念として提起しています。これは、歴史の原型として、人間のスタート時点として設定されているんですが、もう一つここで言われていることが重要だと思います。彼は歴史を「外在史」と「内在史」に分けた方がいいと言っています。外在史は文明史で、モノの発展に象徴されます。内在史は精神的なもので、別に考えた方がいいのではないか。19世紀のヘーゲルやマルスの頃は外在史と内在史、つまり文明史と精神史が重なって幸

運な一致状態にあった。だけど、そこには二重性があって、ズレを含んでいるのが本来なんじゃないかと言います。例えばエコロジー志向は文明史から見れば単なる反動ということになるけど、精神史から見ると単純にはそう言えない。

僕の関心はそこにあつて、今日のテーマにも関わりますが、ある時から超能力とか、それから近代医療の外側にあるさまざまな療法、気功や心霊手術に対する関心が高まってきたわけですね。そういう言わば近代の枠組みでは説明不可能なものとして迷信だと退けられてきたことになぜ俺は関心をもつんだろかということですね。僕はそれが何なのかについて考えてきたんですが、文明史だけでなく内在の歴史があつて、それは別の動き方をしているという理解をすれば、迷信と一括りにされるようなものに対する関心をもつことは、中沢新一の言葉で言えば野生ということに対する関心であり、あるいは吉本隆明の言葉で言えばアフリカの段階の精神のあり方に自分の内面が向かっているんじゃないか、これは精神史と文明史の相互の関わり合いの中で出てきている問題なんですね。僕が関心をもっていることは、軽くなつていきたいという志向性を、大きな枠の中で、それが出てくることの必然性について教えてもらったと思ったんです。

大澤——なるほど、ここにも面白い問題がいろいろあつて、僕がうまく言葉にできない部分にも関わっているんですが、まず表面的なことからいくと、誰でも知っているマックス・ウェーバーによると近代化は「合理化」なんですね。それは「呪術からの解放」で、19世紀後半から20世紀前半に生きた彼には世界はそう見えていた。しかしそれは吉本さんの言葉を使えば、外在史と内在史が一致していたからですね。ところが今となつてみるとウェーバーのこの言い方は必ずしも正しくなかったことが明らかになります。つまり最も前衛的なテクノロジーとある種の野生の感覚、あるいは呪術性、神秘性の感覚が必ずしも背反しない。これはニューエイジ・サイエンスにより顕著なんですが、ある種のねじれがあつて、呪術から距離を取るためにできた科学が進めば進むほどむしろ呪術と同じものになっていく、そういうメビウスの輪のような構造がどこかにあるらしいということが確実になってきたように思います。

さきほどの「アフリカの段階」という表現が適切かどうかは別にして、それは人間が人間であることのスタートを問題にするような段階なんですね。するとここには人間であることのアイデンティティが賭けられて

いると言える。例えば歴史を見るときにいろいろな見方がありますが、特にナショナル・ヒストリー(国民史)は、これまでの主流の見方ですね。日本の歴史、フランスの歴史というように、それぞれのナショナルリティごとに縦割りにして歴史を見ていく。邪馬台国が昔の日本(日本の起源)のような感じがしてしまうのも、ナショナリズムの発生以降の遠近法的転倒の果てに現われる歴史観です。こうしたことを惹き起こすのが、ナショナル・ヒストリーなわけです。ここでは日本と日本以外の国がどういう差異によって成立してきたかということが歴史を問う視線において賭け金になっている。それに対して、「アフリカの段階」ということで考えるとすると、歴史で賭けられていることは人間とは何であったかということだと思います。20世紀の終わりになって、かつてのナショナルなアイデンティティではなくて、人間が人間であることのアイデンティティが過去の来歴を問うときに最も重要な照準点になっているのではないのでしょうか。つまり、野生と人間の区別に歴史が照準しようとしている。逆に言えば、人間を野性との連続性の中で位置づけようとしていることになるわけですから、人間が有しうる「野生の思考」みたいなものが主題として浮上してくることもなる。

父親の否定と父権の復権

芹沢——このところいろんな経験をパタパタとしました。一つ二つお話しすると、一つは老人介護の問題です。例えば老人ホームは一日が細かくスケジュール化された場所で、そのペースに合わないお年寄りや「問題老人」になって、老人ホームを出ていかなければならなくなる。九州にある「宅老所」——普通は「託老所」と書くところですが——はそうした老人たちを介護して、とてもうまくいっているケースなんです。うまくいった理由の一つは、日常のスケジュールをなくしたことがあります。この「宅老所」の一日は、まずお年寄りたちとお茶を飲むことから始まる。一般的には老人ホームでは介護人の負担軽減ということでトイレに連れて行かないで済むようにおむつをさせられている。当然お茶を飲むこともなかった。しかし「宅老所」ではお茶を飲みますから見計らってトイレに連れてゆく。すると尿が出る。そのうちに尿意もよおします。老人たちは今までおむつをさせられていたために失っていた尿意感覚を回復する。午前中は茶飲み話をして過ごし、天気次第で表を歩くということをするうちに、家にいるのと同じような生活の基本が回復してきます。老人ホームの、まるで幼稚園のよ

うな分刻み行動スケジュールからの解放が良い結果を作り出したわけです。この話を聞いたときに、僕らは何か問題が起きるときに、即座に対応して解決しようとするのをしてきたわけですが、それはどこか違うのではないかと思います。

これは不登校の問題も同じで、対処が、子供たちを閉じこもらせたり、家庭内暴力につながっていくように、さらに事態を悪くしているんです。「一人でいたいんだからほっといてくれよ」ということに対してなにか対処してしまうことでかえってことを面倒にしているんですね。

大澤——ええ、良くわかります。対処していくということは、どこか「重み」を与えていくことでもありますね。「重み」を与えていくというのは、うまくいかない人——不登校であれ、「問題老人」であれ——を縛ることでしよう。今お話しになったのは、一見軽すぎるがゆえにうまくいかないものに対して、「重み」を与えることで問題を解決しようとするのではなく、逆にかえって、徹底的に軽くすることによってこそ問題が解決するという逆説を示していると思うんです。

それは芹沢さんがおっしゃる「イノセンス」ということともつながりますね。つまり子供をイノセンスの状態から解放し、責任の主体へと鍛え上げていく際に、私たちは普通、子供の性質とか行為について子供自身に責任帰属させていくことが——例えばこれこれのことはお前が悪いんだよと教えることが——必要だと、考えたい。しかし、芹沢さんは、子供のイノセンスをまさにイノセンス(無罪であり責任がないということ)としてそのまま承認してやることで、かえって、子供は自らの宿命(すでに決定・選択されてしまっていること)を自ら引き受ける(自らの責任とすることができるようになる、という意味のことをお書きになっています。フォーコーが言うような規律訓練によってではない、およそ規律訓練しない、全的な承認が人を主体化することがありうる、ということだと思います。酒鬼薔薇聖斗の「透明な存在であるボク」というのも、いわば存在を全的に承認してくれている場所がボクにはないために、自分が透明化しているように感じられるということだと思います。

このこととも関係があると思いますが、「重み」を与える作戦というのは、最近の傾向で言えば「父権の復権」という主張ともつながってしまうんですね。「重みと威厳と超越性を備えた強い父が、時には体罰も辞さない強さをもって現われるべし」という議論は、「軽さ」に対する「反・軽さ」みたいなものとして考えられます。こういう議論はほとんどくだらないと思います。

が、その上で、ものを考えるきっかけにすることはできる。まず父権を求めているのは一体誰かということがあります。その80パーセントはいわば「管理者」サイド——老人ホームの管理者、学校関係者、親、あるいは国家——でしょう。そのうえで残りの20パーセントくらいでは逆の面もあると思うんです。つまりそれは子供です。ただ、子供が要求している父権は大人が与えようとしている父権とは全く違うもので、そのことを、最近の二つの事件が例証していると思うわけです。

一つは芹沢さんも書かれていましたが、高校教師が家庭内暴力の息子を殺してしまった92年の浦和市の事件です。この家庭には普通の意味での父権はあるんです。父は言わば世間的にも「尊敬される職業」に就いていますし、実際、妻にも尊敬されている。殺されることになる長男は究極的には父親をどうしても尊敬しきれないんだけど、父を立派な人物のはずだとは思っている。この事例では父親には父権があるんですが、しかし全く見当はずれなんです。強い父として振る舞って、息子に説教をしたり、時にはちょっと体罰をしたりしてみるけれども、結局子供の方ではそれを受け入れない。最後には息子から「てめえ」というような侮蔑的な呼ばれ方をして、父親は決定的に自尊心を傷つけられる。「てめえ」と言うことは「あなたは父ではない」と言うことです。父としての権威をトータルに否定され、父として完全に失墜してしまうと、父の側では、もう「こいつを殺してしまうしかない」と思いつめるまでになってしまう。つまり父権を發揮してもうまくいかないし、父権を復権すればダメな息子が良くなるという、よくあるくだらない議論も全く間違っているということを理解させる事例です。

他方、これとよく似た、もう一つの事例を並べて考えてみる必要があると思います。去年、金属バットで中学生の息子を殺してしまった東京都文京区の事件がありました。この場合の父は、徹底的に子供の行為を受け入れる父として現われています。息子の要求を全部のんでやる。権威や強さを極力抑える父親、包容力の父として何とか振る舞おうとしていた。報道ではカウンセラーの薦めもあつてそうしたのですが、しかし、子の暴力は全然止まらなかった。むしろ、どんどんエスカレートしていく。このメカニズムは比較的簡単に見抜けるものだと思います。例えば殺害の前日、父は息子に「サンドイッチを買ってこい」と言われ買つてくると、「こんなサンドイッチではない」と言われ、激しく罵倒される。しかし、ちゃんとサンドイッチを買つていけば息子は満足したかといえ、もちろんそんなことは

ないわけで、子供が欲しているのはサンドイッチではない。彼が欲しているのは、父が父になることなのです。これでもか、これでもかと父を虐待していくことによって、息子は父が父になって彼に反撃し、父として君臨するようになる瞬間を待っている。

この二つの事件はともに子殺しの事例です。これらは、一緒に合わせて考えてみると、今の父という存在が置かれている非常に難しい状況を象徴していると思います。父が父になっても否定され、父をやめても否定されるという両極だけなんです。父が子供に重力を与えるものとて君臨しようとしても、子供は重力の網の目に少しもかかからない。他方、子供を徹底的に解放して、重力の重みの中で捉えるのをやめようとしても、これはこれで拒否されてしまう。「父権の復権」という議論を、単純に反動的なお父さんたちの足掻きと捉えれば全くつまらない話ですけれども、子供の側が今どういう父権を求めているのかということを通して考え直すならば、何か抜き差しならない困難、逆説が起きようとしているのではないかということを感じさせるものがあります。

芹沢さんは、根本的に家族をやめるどうか、ということまで射程に入れて考え直すべきだ、ということまでお書きになつていたと思いますが、僕は「重さからの解放」とか「重さへの回帰」というのは両方も地獄をみるような、そういう苦しい状況にいる気がします。芹沢——それぞれの事件は、相反する父親への向かい方、父の在り方を示したと思いますね。そのうえで僕は、文京区の事件にちょっとひっかかった部分がありました。それは息子がいやいやながらにせよ何にせよ、7年間学校を一日も休んでいなかったということです。伝わってくるころによれば、小学校では彼はサッカー部にいて、暗くなつても父といっしょにサッカーの練習をしないと翌日学校へ行けない。中学校時代のバスケットボール部でも同様で、父と二人での練習が欠かせなかった。そうした関係が父親との間でできてしまっていたらしい。はたからは、子供とつきあうとていいお父さんに見えますが、実はこれは依存関係を作っていたのだと思えてならないんです。ある時、子供はそこを切りたいと思ったのではないのでしょうか。

僕はその時、父は「自分はおまえとのつき合い方を間違えた、それがおまえをここまで追い込んでしまった」ということを自覚して子供に詫言べきだったと思います。しかもこの事件の父親は自分は少しも悪くないと思っていますね。子供の暴力を受け入れるべきだというカウンセラーの忠告も、子供を殺してしまう遠

因になったというように供述しています。僕は、この父親は事態をきちんと引き受けていないなと思いました。子供は父とのこうした依存関係から軽くなりたくて登校拒否をし、さらに家庭内暴力を起しているのに、父親はそのメッセージを受けとめ切れていない。そして自分はこんな関係を息子と作ってしまったということへの自覚が足りない。その点で言えば、浦和市の先生と少なからず似ているのではないか。ただ現象的には大澤さんがおっしゃるように子供が父を求めているというのは確かだと思います。問題はどんな父を求めているかですね。悪い父は求めていません。唐突ですけど、例えば母は、シンボリックに言えば黙って隣にいて抱きしめてくれる存在で、父は言葉として現われるものというふうにしてみます。

そうしてみると、ちょっと面白い体験をしたことがあるんです。この夏に初めて高校生1000人くらいを相手に講演をしたのです。終わってから学校は感想文を書かせて、そのうちの20篇くらいを私に送ってくれたんです。中に一通、こういう内容のものがありました。「去年講演を行なった心理学の先生の話は泣けるようないい話だった。でも今年の話聞いた後では、いい話におしつけがまじさを感じた」というようなことが書かれていました。私は考えていた以上に高校生はしっかりと判断をしているんだな、どちらをおしつけがまじいと感じ、どちらをそうでないと感じるかという力は十分にあるんだなということを感じました。父という問題を突き詰めて言葉の問題として捉えるならば、答えは明瞭ではないかと思うんです。少し我田引水なことを言っているかも知れませんが、言葉を父であるとするなら、父の「重さ」ということと言えば、多少啓蒙的であったり、いいお話だったりするものに関しては、きちんとチェックする能力もっているんです。

さらに困難な父

大澤——そうですね、文京区の事例と浦和市の事例は一見反対のように見えますが、実は同じことの表裏だということは僕も思います。そのうえで、ではどういう父が望まれているのか、どういう父がいいのかということ考えた場合、あえてロジカルに単純化して考えると、存在の次元と行為の次元とというのがあって、僕らは立派な行為をさせようとしてしまいますが、まず存在自体を承認してやるということが大事だと思います。この行為だから承認されるとか、この行為だと罰せられるとかいうことではなくて、それ以前

におまえがいるということだけがポジティブなことなんだということだと思います。酒鬼薔薇聖斗事件でも同じことだと思います。自分が「透明な存在」であるということの意味はそこにあつて、彼だって人並みには親や先生や友達に関心をもたれているけれども、肝心なところを見られていないということである。彼が欠けているように感じていたのは、彼を存在の次元で承認してくれる眼ということだと思います。

僕はあの事件が起きたときに、宮沢賢治の「猫の事務所」という童話を思い出しました。内容を簡単に言いますと、猫の事務所に勤めているいじめられっ子の「竈猫(カマネコ)」という汚いネコの話です。これは「よだかの星」と似た童話ですね。竈猫は、事務所で嫌われており、同僚にいじめられ、またボス(上司)にもあまりよく思われていない。事務所のボスが酒鬼薔薇聖斗の事件で言えば学校の先生に当たるでしょうね。そうしているうちにある日、竈猫が風邪をひいて、事務所を休んでしまう。再び事務所に出てくると彼の全仕事が違う猫にまわされている、彼が「おはよう」と挨拶しても知らんぷりをされる。だれもが竈猫が存在しないかのように振る舞うんです。ここで竈猫は「透明な存在」になつてしまつている。そしてついにしくしくと泣き出してしまふわけです。ところがこの話には最後の逆転ホームランが待っています。獅子がこの事務所の様子を外から眺めており、どうもただならぬ悪い状況になっていることに気がついて、ドアを開けて入ってくる。そして、こんな事務所はやめてしまえ、と解散命令を出し、事務所は解散されてしまうわけです。竈猫以外のネコは、獅子が入ってきた時点で、心に疚しいところがありますから、慌てふためき、その視線から逃れようとする。つまり獅子の前で透明であろうとするわけです。でも竈猫だけは獅子の前にすつと対峙することができる。つまり竈猫はこの事務所にいる限りは「透明な存在」になつていたのですが、その「透明な存在」こそが最後に獅子の眼差しの中で存在を取り返す、という構造になっているわけです。

酒鬼薔薇聖斗はJ君の首を校門の前に起きます。明らかにこの首はその日の朝校門から入ってくるはずの学校関係者が見るように置かれました。この眼差しはさっきの話では獅子の眼差しに対応します。酒鬼薔薇聖斗の言葉で言えば「バモイドオキ神」の眼差しということになるんじゃないでしょうか。猫の事務所では同僚たちが獅子の前で慌てふためいたように、酒鬼薔薇聖斗の頭の中では、「バモイドオキ神」

の眼差しの前で学校関係者が慌てふためき、逆に、それまで透明だった自分こそが突然実在性を取り回復するという逆転ホームランが夢想されていたのではないか。こうした迂回路を通った上で父の話に戻りますと、この「バモイデオキ神」の眼差しに託されている何か、この少年の求めている父、自分の存在を認める父なんじゃないか、ということです。

やはりある種の現代の困難があると思います。というのは、父はやはり言葉を出さなくては行けない。しかし、それは行為に影響を与えるのであって、行為の前に存在を承認する父にはなりえない。言い換えれば、存在をトータルに認めようとする父は言葉を発しない存在と化し、父としての実在性を希薄にしなければならなくなる。しかし逆に父であろうとして言葉を発してしまうと、その言葉は存在を承認するものではなくて、行為への正負のサンクションになってしまうということです。父が父であろうとするとどうしても困難や矛盾を抱えてしまう時代に僕らは入ってしまっている。父が存在するためにはどこかに「重み」を与えなければいけない、それが父が存在する証拠なのです。ところが「重み」を与えるということはどうしても反動的なことになってしまう、文京区の父にしろ浦和市の父にしろ、子供から見れば裏切り者のくだらない父になっている。一方、父が子供に究極の「軽さ」を与えてやろうとすれば父自身が完全に無化していかなければならないし、それは子の要求することでもない。子の要求に応じようとするれば、どうしても、父はダブル・バインドの状況に置かれてしまう。こういうところが僕らの危機があると思います。

芹沢——そうですね。「猫の事務所」では確か、最後に作者は半分は獅子に共感するが、あとの半分はどうなんだろうか、というような疑問符を付けていたと思います。獅子を父に擬することができるのであれば、強権的な父のあり方を半分は認めつつも、あと半分はどうしても疑問に思ってしまうということなのではないでしょうか。

大澤——ええ、最後の部分は「僕はちよっぴり獅子に賛成です」といふような書き方でした。ここには確かに読者にも考えさせるような留保があります。僕もこの「猫の事務所」の解決に対してはちよっぴりどうかな、というのがあつたんです。まず、内部からの変化というよりも、いきなり救済が外部から現われる——賢治の場合、大乘仏教的な菩薩の救いということになるのでしょうか——ことに疑問があつた。また、一回事態をトータルにキャンセルさせてしまうことが本当の解決だったのか、と問題にす

ることもできます。世界そのものは事務所ではないからキャンセルできませんから、それは完全な解決にはならないはずですが、父のあり方はさらに難しくなつていく、というふうにも読めるのではないかと思います。

反重力的な親子関係へ

大澤——これはもうあまりに多くの人が論ずるのもう嫌なのですが、《新世紀エヴァンゲリオン》というアニメーションがありますね。このアニメがやはり父とか「重さ」ということに関係がある。主人公のシンジ——彼がまた14歳で酒鬼薔薇聖斗と同年齢であることにも興味がかかりますが——がネルフというところに呼び出され、ネルフの司令官でもある父に会うところから、物語は始まります。彼は典型的な家父長制の強い父であり、その父に認められたいという気持ちもあつてシンジはネルフにやってくる。半ば父に捨てられた気分だった彼が、初めて父に誉められ嬉しく思っている様子が序盤のストーリーの中で描かれています。ストーリー全体はとても複雑に構成されていますが、単純に図式化してしまえば、シンジは、父の支配している領域からその後離脱していく。シンジは、ではどこへと離脱して行くのかというと、「エヴァンゲリオン」という人造人間によって象徴され、支配されている世界がそれです。「エヴァンゲリオン」の略称である「エヴァ」はアダムとエヴァのエヴァとも対応しており、アニメを見れば直に分かるように、エヴァは、女性性とか母性とか、あるいはより端的には子宮を表現するアレゴリーになっている。小谷真理さんもかなり書かれていたが、家父長的な世界から抜け出して、「エヴァ」の女性的な世界に帰っていくという構図です。

ただこの作品はこれだけではつまらないのですが、この上にもう少しだけ仕組みがあるような気がしているのです。というのは、このテレビ版の最後は、一見したところそれまでの展開を完全に裏切って、「父にありがとう、母にさようなら」という言葉なのです。父的なものを否定し母的なものを肯定してきたストーリーが、最後の一言でまったく反転しているのはなぜだろうか、と思うんです。

先ほど芹沢さんが父と母の対比をなさつて、父は言葉として現われる者、母は抱く、すべてを受け入れる者であるということをおっしゃられたが、僕もその対比は正しいと思うんです。そのうえであるべき父は何だったのかということを見ると、子が欲する父はやはり行為を厳しく律する父ではないんです。そうではなくてさっきも言ったように存在を認める父なの

です。そうすると父はだんだんと母そのものと同じになっていく。つまり父の世界と母の世界が同じ世界になってしまふ、または父の正体を見たら母だった、という寓話だと思うんです。

《新世紀エヴァンゲリオン》ではネルフの建物の底にアダムという不可思議な生命の象徴が隠されている。アダムの秘密は最後に暴露されるのですが、それはカヲルという登場人物が「アダムはリスだったのか」と言う場面がそれです。アダムは原始の父親の象徴です。そしてリス(あるいはリト)はエヴァの前のアダムの妻だとされている神話上の人物です。アダムに先立つ原始の女の象徴なのです。つまりアダムだと思っていたものが実はリスだった、リスが単に男装していただけだったというふうに読めるんです。父の世界を探索していくと、父の否定であるところの母こそが父であったという逆説としてもこのストーリーを解釈することができるのではないのでしょうか。

芹沢——面白いですね、吉本ばななの『キッチン』も女装するお父さんの話でしたね。大澤さんの《エヴァンゲリオン》解釈とばななさんを繋ぐような線はきつと偶然できたものなんでしょうが、実際のところお母さんだけで子供を育てていくというケースにこの頃出会います。男性はいるわけだけど一緒に生活してないし、戸籍上も夫ではなく、現実的にも夫のように振る舞ったりはしません。選択的に母子家庭を選ぶ女性がそれほど肩肘を張らずに出てきているんです。ことによったら、彼女たちが父の役割も含めて両方できるようになってきているのでしょうか。そうだとすると「反重力」的な親子関係も現われているとつてよいかもかもしれません。

大澤——そうですね、ただ《エヴァンゲリオン》も終わりの方はかなり暗いんです。アダムの真実はリスであったとか、父の真実はエヴァであったとかそういう逆転の発見や、あるいはエヴァこそが父でありかつ母であったということがハッピーなこととして描かれているかという、そうではなく困難な問題として描かれているんですね。

僕はあれを初めてテレビで見たときに、少なからず驚いたんです。というのは、あの頃はまだオウム事件の真最中で、あのアニメはほとんどオウムの世界と同じなんですよね。もちろん作品の基本的な構想が練られたのは、オウム事件よりはるかに前でしょうから直接の影響関係は考えられない。だからこそ、むしろその同時性にも驚かされますが、これほどオウムと同じ世界の作品が堂々とテレビで流されることに驚

いたんです。例えば麻原彰晃は「グル」「尊師」と呼ばれます。「グル」とか「尊師」というのは主に新新宗教によくある呼称です。旧新宗教の場合はだいたいリーダーを「おやじ」とか「おとさま」「ちち」という感じで父親の比喩で呼ぶんです。新新宗教の場合、古典的な父とは違って、「グル」が父を否定した父として出てきているからです。

《エヴァンゲリオン》のエヴァもそうなんです。碇ゲンドウという、いわば古典的な父がいるんですが、その古典的な父の否定を介して出てくる逆説的な父がエヴァという形式をとるんです。それが文学的、芸術的な悲劇だけでなく、実践的な悲劇ももたらすことをわれわれはもはや知っていますから、もしわれわれが直面している問題に対する答えが《エヴァンゲリオン》やオウムに示唆されたものでしかなかったら、これは大変な問題です。それに対する別の手をわれわれはもたなければならぬと強く思っているんです。

芹沢——つまり、古典的な父を分離したときに現われる父は、自ら父として登場するわけではなく、呼び出されて出てくるんですね。オウムの麻原の場合も、自らが父となったというよりも弟子たちに父にされたというところが大きかったと思います。そしてそこから言葉が出てこない状況を作ってしまった。さらにその言葉を相対化するような、黙って隣にいるような母を彼らは生み出すことができなかつた。もし「父権の復権」なんてことを言うならば麻原まで肯定しなければいけませんね(笑)。

だから間違いなくその方向はダメなんです。言葉が出てくるところと消えるところの両極をそなえた世界——宇宙と言ってもいいかもしれませんが——をどう完備できるかが重要な問題なのです。母子関係だけで家族を作っていくという場合も、周辺がどうその関係を支えていくかということに係わってくると思います。彼女たちは意図して家族の三角形を作らないわけですから、実践として困難に思われるその形式を永続的にするための支えの構造がどうやったら作れるのかを考えることが大事に思われます。「軽さ」を希求しながら彼女たちが新しい家族の場所へ着地できるかということだと思うのです。 *

[1997年10月21日、東京]

せりざわ しゅんすけ——1942年生まれ、評論家、著書=『オウム現象』の読解(筑摩書房)、『現代(子ども)暴力論』(春秋社)、『「イエスの方舟」論』(春秋社、ちくま文庫)など。

おおさわ まさち——1958年生まれ、京都大学助教授(社会学)、著書=『電子メディア論』(新曜社)、『身体の比較社会学-II』(勁草書房)、『虚構の時代の果て』(ちくま新書)など。